

令和8年度第1回京都市明るい選挙推進協議会総会 摘録

➤ 日時 令和8年5月20日（水曜日） 午後3時～午後4時45分

➤ 場所 京都市役所分庁舎4階 第3会議室

➤ 出席者

・委員（敬称略、順不同）

立命館大学名誉教授（◎）	村山 皓
同志社大学教授（○）	西澤 由隆
ジャーナリスト	村上 祐子
京都新聞社論説委員（○）	日山 正紀
公益社団法人京都青年会議所副理事長	松本 洋典
NPO法人Mielka	田辺 悠人
市民公募委員	村松 杏美
京都市選挙管理委員会委員長	毛利 ゆき子
左京区選挙管理委員会委員長	藤本 就一

◎ 会長 / ○ 副会長

・事務局

京都市選挙管理委員会事務局	事務局長	田中 公太良
//	次長	浅井 雅英
//	選挙課長	町田 憲治
//	啓発係長	今井 愛一郎
//	啓発担当	浅井 優佑

➤ 摘録

1 村山会長による挨拶

2 事務局から令和7年度第2回総会后新しく就任された委員及び人事異動に伴う事務局職員の紹介

3 協議

【（1）令和7年度京都市明るい選挙推進事業の実施結果について及び（2）令和8年度京都市明るい選挙推進事業計画について】

事務局： 資料3（「令和7年度京都市明るい選挙推進事業実施状況報告書」）・
資料4（「令和8年度京都市明るい選挙推進事業計画」）に基づき説明

<論文コンクール「わたしはこう考える」について>

会長： 応募テーマは毎年変わっているのか。「わたしは怒っている」は毎年テーマに設定されており印象に残っているが、「もしもスマホがなかった

たら」は以前なかったかと思う。

事務局： テーマは審査員の方々に毎年議論いただいております、結果として「わたしは怒っている」など同じテーマが選ばれることがある。

委員： 昨年度の審査員を務めたが、主な対象者である中高校生がテーマによっては書きにくいということも考慮し、書きやすいと思われる「もしもスマホがなかったら」をテーマとして採用した。

副会長： スマホがある種のインフラになっている一方で、功罪があると思う。スマホとの向き合い方は若い人こそ考えなければならないと思う。

会長： 論文コンクールは社会意識の向上を目的にしている部分もあるが、選挙についてのテーマは設定されないのか。

委員： 例えば「もし選挙がなかったら」など、具体的なテーマであれば、単に「選挙について」よりは考えてもらいやすいかもしれないが、テーマを設定するうえで、どのようなテーマであれば書いてもらえるかが重要である。

副会長： 論文コンクールは政治や選挙に直接結びつかないが、政治とは意見表明、言語化や立論をするものである。この論文コンクールは、今ある社会問題に対して自分の意見を表明していく大切な機会だと思う。

委員： 応募数が増加しているが、選管として狙い通りなのか。特定の高校が課題として取り組まれたという説明があったが、全体的に見たら偏りがあるのでは。

また、生活・選挙・政治に対する関心を高めることは意味のあることだが、お金と審査等の時間をかけるのであれば設定されたテーマが児童・生徒の育成という目的に合っているのか検証が必要かと思う。

会長： この事業の目的は、選挙というよりも中学生や高校生の社会に対する意識の向上というもっと基本の部分だと思う。それをやろうとしても学校の先生方が取り組んでいただけないと前に進まない。

事務局： 応募者数が大幅に増えた要因は、新たに学校の課題として取り組んでくれた高校が2校あったことだが、その学校以外にも課題としてくれている学校はある。事務局として偏りがあったとは思っていない。

テーマも政治や選挙に直接は関係なくても、それらを考えてもらうきっかけになればと思っている。

なお、応募された児童・生徒が18歳になったときに投票されたかまでは検証はできないが、少しでも多くの方に応募いただきたいと考えている。

<啓発活動支援事業について>

会長： 知事選挙において所属団体が支援を受けられたとのことだが、支援事業についてどのように考えているのか。

委員： 啓発活動を行うための資金調達は難しい部分もあるため、このような

支援制度があると活動しやすくなる。

委員： 支援制度の範囲で若者にアプローチすることに頭を悩ませている。若者にアプローチするとなると、今回支援いただいた店舗でのシール貼りのような参加ハードルが低いものになりがちである。

副会長： 応募が1件だけということが若者の政治に対する関心が低いことを表しているのではないか。「こんな制度があるからもっと使おうよ」という状況であってほしいと思う。この事業の広報についても今後考えてもらいたい。

事務局： 広報も重要だが、支援要件として「公平・公正な事業であること」などがあるため、若者団体がやりたいことに対して、支援できないという課題も感じている。

<インターネットにおける啓発について>

会長： インターネットにおける啓発についてどのように考えているのか。

委員： SNS広告を1つ挙げるだけでも資金的に難しい。ショート動画を好んで見る若者も多いので、そういった動画を積極的に挙げて若者に訴えるのが精一杯。また、動画がたくさんあるなかで埋もれてしまいがちだが、選挙時にSNS投稿を増やすことで見られやすくなっているのは実感している。

<「政治参画意識向上に繋がる例会」のイベント等について>

会長： (公社)京都青年会議所としてイベントを実施されたが、実施された感想を伺いたい。

委員： イベント自体は見込んでいた参加者数よりも少なく苦戦した。また、市民の意識を変えるのは難しいと感じた。

会長： 政治参画と選挙参画の違いはどのように考えているのか。

委員： 選挙への参画を目的にすると「選挙に行きましょう」しか言えない。政治に関わろうという「政治参画」の先に「選挙参画」があると考えている。

<選挙時啓発全般について>

副会長： 選挙時の啓発活動を思い切って全部止めた又は一部を止めた都市はあるのか。

事務局： 予算や時間の都合で啓発活動が減ったりする場合もあるかと思うが、他都市の状況については詳細には把握していない。

委員： 啓発に十分な時間があつた選挙と、先の衆議院選挙のような突然の選挙で啓発に十分な時間がなかった選挙の結果はどうだったのか。

会長： そもそも啓発活動の検証は難しい。指定都市の会議などにおいても検証方法がないか常に議論されている。

<啓発活動全般について>

委員： アニマル園長選挙や選挙物品の貸出は、投票の模擬体験であり、長い目で見たときに投票率向上にも繋がるのではないかと思う。

【(3) 京都市民の政治意識研究部会について】

村山会長より、資料5（「京都市民の政治意識研究部会（案）」に基づき研究部会のメンバーが提案され、出席委員の全会一致で承認された。

4 その他

令和8年度の論文コンクール「わたしはこう考える」の審査員を日山副会長と村上委員に、明るい選挙をすすめるポスター募集の審査員を日山副会長に依頼し、両委員の承諾を得ていることを報告。

5 毛利・京都市選挙管理委員会委員長より挨拶

(午後4時45分終了)